国際理解教育コース，日本語研究
担当教員：佐藤栄作

日本語教師を目指す学生のための日本語文法入門

国語教育講座・佐藤栄作

１．授業の概要

昨年度まで、総合人間形成課程、学校教育教員養成課程とも、１年前期「日本語概説－日本語学入門－」、１年後期「日本語研究－日本語文法入門－」であったが、本年度からキャップ制の導入により、学校教育教員養成課程は、「日本語概説」が２年後期、「日本語研究」は３年前期の開講となった。これまで「日本語研究」も、同時開講、並行開講してきたが、本年度は、純粋に、総合人間形成課程だけの開講となった。

「日本語研究」は、「研究」と称しているが、内容は、音声・音韻、文字・表記を中心とする日本語学の入門である「日本語概説」に続くものであり、「日本語文法の入門」である。

総合人間形成課程国際理解教育コースのカリキュラムとしては、「日本語概説」→「日本語研究」→「日本語と日本事情」→「世界の中の日本語演習」と受講することで、母語を客観視できるようになり、日本語についての基本的な知識と日本語研究法が習得できる。

また、この授業で日本語文法入門を扱うことで、２年前期からの「日本語教育概論」→「日本語教育法」→「日本語教育研究」→「日本語教育演習」につなげ、日本語教師プログラムが体系的に学べるようにしている。

授業内容

本年度の授業内容は以下の通りであった。

第１回「日本語母語話者にとっての日本語文法」
第２回　学校文法とは①　言葉の単位
第３回　学校文法とは②　主語述語
第４回　学校文法とは③　文の成分
第５回「は」と「が」の働き①
第６回「は」と「が」の働き②
第７回　ウナギ文と「象は鼻が長い」
第８回　品詞と活用①　活用形の問題点
第９回　品詞と活用②　日本語教育の活用表
第 10 回　品詞と活用③　品詞の問題点
第 11 回　品詞と活用④　助動詞
第 12 回　述語の構造　テンスとアスペクト
第 13 回　述語の構造　方言アスペクト
第 14 回　述語の構造　ヴォイス
第 15 回　補足、レポート課題の提示

受講生

本年度の本講義の受講生は、国際理解教育コース１回生１４名、同３回生２名、特別支援課程４回生１名、大学院留学生１名、合計１８名。本年度は、国際理解教育コース１回生のほとんどが受講した。特別支援課程の４回生は聴覚障害者であり、ノートテイカーが毎時間２名付いた。「は」と「が」との違いが難しいので、それを学ぶために受講したと話していた。

２．授業の目的・到達目標

【目的】―国際交流に関わる仕事に従事する者、あるいは中学校・高校の国語科教員、外国人に対する日本語教師として身につけておくべき日本語の概要を学んだ学生が、特に重要な分野について、深い知識を得、分析法・研究法を学ぶ。

【到達目標】

(1) 日本語の文法に興味・関心を持ち、現代日本語文法で注目される事象、問題となるテーマを挙げることができる。

(2) 国語科教育における文法と日本語教育における文法との相違点、それぞれの特色と問題点を説明できる。

(3) 現代日本語文法の基本事項について、日本語教育、国語科教育において授業を担当できる。

【ディプロマ・ポリシー】

２１世紀の豊かな多文化社会を築くため、欧米・日本・中国の言語文化に関する深い理解を有し、得意とする分野の専門的知識を修得している。（知識・理解）

３．授業評価法

授業評価は、最終回に実施した学生アンケートによる。アンケート項目は以下の通り。

1　最も印象に残ったこと
2　日本語教師になって役立つこと
3　取り上げてほしかったこと
4　改善点と改善策

４．授業評価結果

アンケート回答者は１８名。

1　最も印象に残ったこと（後の数字は人数、な

ければ１名、以下の問いも同じ）

①文型

②格助詞の使い方

③日本語の難しさ　　２

④母語を説明することの難しさ　２

⑤品詞の定義は従来通りでいいのか

⑥中学の国語でうやむやになっていることがわかったこと

⑦ウナギ文

⑧バカボンのパパの「～のだ」

⑨進行形だと思っていた「～ている」がそれだけではなかったこと

⑩アスペクトの説明でいろんな例を挙げて分析したこと

⑪西日本方言の「ヨル形」「トル形」　７

①②は、これまで学んだことを深められたということであろう。③④は、日本語教育という視点から日本語がとらえられたことの表れで、本授業の目標到達のための必須要件。⑤⑥は、学校文法を批判的に見られるようになったこと。⑦⑧⑨⑩は、学校文法では取り上げない事項であり、それが印象に残ったのだろう。日本語への興味の表れとみたい。⑪はアスペクトの発展として毎年取り上げているが、毎年、これを挙げる学生が多い。高校まででは、方言はほとんど扱わず、取り上げても抽象的な「大切さ」か表現効果かくらいだろう。そこへ、共通語では表現できないことを言い表せる方言アスペクトの話をするから、強く印象に残るのだと思う。

２　教師になって役立つこと

①日本語文法の説明　　２

②子どもたちに説明ができて納得してもらえるのではないかと思った

③活用について説明が詳しくできること

④格成分による動詞分類

⑤自動詞と他動詞

⑥国語の授業では教わらない「テイル形」や動詞の種類

⑦日本語教育の動詞活用表　２

⑧教科書の比較

⑨教科書は正しいと思っていたが実は問題点が多いこと　　２

⑩学校文法のあいまいさ

⑪日本語の難しさを学習者と共感できる

⑫日本語学習者の立場に立つことの大切さ

⑬留学生の日本語学習の難しさ

⑭日本語母語話者であれば気づかないところに気づけた

⑮日本語母語話者と日本語学習者とでは文法の説明が異なること

⑯英訳の際に、思っている日本語とは別の意味になってしまうことは、日本語教師として知っておくべきではと思った

①～③は日本語文法についての理解の深まり。「できること」で書いてくれたのはうれしい。④～⑦は文法知識の広がり・深まり。⑧～⑩は学校文法の相対化。日本語教師として必要。⑪～⑯は日本語教育の視点の獲得。具体的に回答してくれている点が好ましい。授業の目標に到達している受講生が存在している。全員がこうなるように努めなければならない。

３　取り上げてほしかったこと

①他の方言　　３

②方言と共通語との比較をもっと

③マンガの中の言葉　　２

学生の方言への興味は大きい。ただし、日本語教育のプログラムにおいては大きく時間を割くのは困難である。③は途中での挿話に反応したもの。これは、次の「日本語と日本事情」で取り上げる。

４　改善点・改善策

①とても毎回たのしい授業だったが、少し難易度が高かった

②文法が苦手だったのでついていくのが大変だった。何を勉強しているのかわからなくなることもあったが、考えたこともない日本語の深い部分を考えるのは楽しかった

③もっとグループで考える時間を取り入れていたら良かった

④板書がもっとあれば良かったと思う箇所がいくつかあった

①②は難度の問題。結果としては大きな問題になっていないが、気をつけたい。③④は貴重な意見。グループ学習、板書、次年度は改善したい。

５．まとめ

昨年度、学生から受けた改善ポイントは、「外国語との比較をもっと取り入れてほしい」だったが、改善は進まなかったので反省している。担当者の英語力アップも諦めてはいけないが、本年度の学生からの意見を取り入れ、**学生の英語力を利用したグループ学習を次年度は活用したい**。本年度改善策として考えていた「中国人留学生の力をもっと借りる」についても、例年と同程度だった。これについては再度チャレンジしたい。

授業時間外学習を促すための具体的な対応は、何度か宿題を出したにとどまった。さらに工夫したい。毎回、冒頭の１０分を前回の復習に当てた。よかったと思うが、やや進度が遅れた。内容を吟味し、１４回目に試験、１５回目に講評と補足というかたちに改善したい。